

『修身教授録』が教える 志と覚悟

三菱電機社長
経団連宇宙開発利用推進委員長
日本トルコ経済委員長

うるま けい
漆間 啓



18年前、海外赴任から戻って初めて手にした書物が森信三先生の『修身教授録』だった。人間一人ひとりが人生をどのような覚悟で生きていく必要があるのか、先生の迫力と慈愛の心で語られている。本書は先生が40歳を過ぎたころ、大阪で師範学校の生徒に教えた時の筆録である。当時、私はすでに46歳、本書を手にして何も語ることができなかった。己の未熟さと同時に、若いながらも先生がここまで人生を深く洞察されていることに感動させられたことを鮮明に覚えている。

本書で先生は、「人生二度無し」という考えを基本に、自分が天から受けた方の一切をかけて、毎日毎日を真に命懸けで生きていくこと、そのためには自分自身が真に生涯を貫く終生の目標、すなわち志をたてること、まずもって大事であると語る。私はこれまで、自分なりに必死に生きてきたつもりだったが、世の中のために少しでも貢献するだけの強い志を貫いていたかと言われると、恥ずかしい限りである。

そこで私は、当社の企業理念（パーパス）である「たゆまぬ技術革新と限らない創造力により、活力とゆとりある社会の実現」の具現化を自身の志と重ね、情熱と熱意に加えて執着心をもってこれに取り組むこととした。情熱は実行への強い想い、熱意はそれを前に突き進める力であり、執着心とは、成し遂げるために

色々と困難があるうとも、それを乗り越えて実現していく意思だと思っている。

また、先生は「最善観」を説いている。これは、人生でどのような出来事が降りかかろうとも、全てを天命として感謝し、受け入れることだと言う。人間は一喜一憂しがちであるが、「天を恨まず人を咎めず」自分に起きていること全てを心から受け入れることで、人生をポジティブに生きる秘訣が語られている。本書に出合ってから以降も、私は公私にわたり、何か身に降りかかる時、どうしても喜怒哀楽を感じる。特にVUCA^(注)の時代と言われている中、ビジネスの世界に身を置いていると、予期せぬ様々なことに直面する。本来であれば泰然自若として臨まなければならない心が揺れる時がある。そのような時、本書は私を可能な限り第三者の自分として見る機会を与えてくれる。

ほかにも、『修身教授録』は私が遭遇する様々な局面で、個人の生き方を正してくれる。少し楽をした

いと思っても、本書に接すると自分が生を受けた意義を自覚させられる。正に座右の書である。



発行：致知出版社